

「それだけ？」のあと

内田 友子

原中貴士「原ばくの図」

丸木位里・俊のかいた

原ばくの図を見た

おとなもこどもも

犬もねこもうまも

くるしそつだつた

みんなはだかだつた

やけていた

千ばづるをつくるコーナーがあった

おかあさんがみんなでおろうかといった

ぼくはみどりのつるをおつた

かえりにかんそうをきかれた

こわかつたといった

おかあさんが

「それだけ？」

といった

おとうさんが

それでいいよといって

ぼくのあたまを

ポンポンとたたいた

十年前、柳川市教育委員会などが全国から募集した「白秋祭献詩」で文部科学大臣奨励賞に選ばれた、当時小学2年生の男の子の作品です。二〇〇一年十月十四日の朝日新聞で紹介されていました。現在十八歳になつてゐるはずのこの男の子は、「それだけ？」のあとに今ならどんなことばを継ぐのかな、と思ひながら読みました。もしかするとおかあさんに「それだけ？」と聞かれて返事に困つたことなんて、今はもうすっかり忘れてゐるかもしれない。

「原爆小説というものがすきではない」と書いた江藤淳は、それは、体験と表現との落差がはなはだしすぎて大概の文学的表現を嘘にしようためだ、と説明しました。たかだか人間が持ち合わせていることばの数では到底足りないとき、それでも人はその体験をどうやって表現していくのだろう。そんな関心から、この研究会を通してさまざまな作品に出会いました。大田洋子は「地獄ということばを使つてはおしまいと思うけれど、地獄の沙汰というよりほかなかつた」と観念したし、原民喜は「この辺の印象は、どうも片仮名で描きなぐる方がふさわしいようだ」と投げ出ししました。国から被爆者へ支給される葬祭料でチュウリップを八

○本買ってください、不相応なら大根でもいいと林京子は怒りを静かに伝え、また、井伏鱒二が書いた小説の描写や言辞は「えげつない」と被爆者を怒らせました。

もちろんことばというものはどの国でも万能の道具ではないし、第一、それを使ったり読んだり聴いたりしている人間がこれまたまったく手前勝手に頼りにならないものなので、だとすれば表現という行為はさういふ危険なところでも成立しているのだな、と今さらながらため息が出ます。それでも誰かが何かを発信するのは、その何かを他者と共有したいからであって、怒ったり怒らせたり褒めちぎったり見限ったりしながら表現の場所では、より有効な共有の方法が多くの人の手で延々と模索されていくのだと思います。

この研究会を通して、本当にさまざまな「表現」のかたちを知ることができました。

さて。

発足当時、この会の目的はなんといっても「場所づくり」でした。「原爆」でも「文学」でも、それに連なる直接的・間接的なことでも、考えたり話したり聴いたりしたい者が集まる場所。なんかそんな感じのもんを作ろうではないか、というたいそう大きな呼びかけに応じて、私もこの会でたくさんの方々とお会い

しました。いちおう研究会と看板を掲げてはいませんが、研究発表なのか雑談なのかつれづれなる思い出話なのかよくわからないものが繰り広げられる「場所」であつたし、まじめに取材したい人も来ればちやっかり宣伝したい人も来て、単に酒席に混ざりたいだけの人はとりわけ大歓迎されたフシもある「場所」だったような記憶もあります。だから、たくさんの方がこれまでこの会を訪れました。そしてこの「場所」を気に入ってとどまる人がいる一方で、いつの間にか来なくなつてしまつた人や、あるいは、きつぱりと三行半を突き付けて去つた人も確実にいました。

十年前におかあさんから「それだけ？」と聞かれて困つた男子が、今も続きのことばを考えているかどうか、わかりません。たぶんもう考えていないでしょう。ほかに考えなければならぬことが、いまの時代を生きていけばきつといっぱいあるでしょうから。

十年という時間をかけ、多くの人によつて作られたこの研究会も今後いつまで、どのようなかたちで続くのかあるいは続かないのか、これもわかりません。ただ、ある日ふと考えたり話したり聴いたりしたくなつた十八歳がふらりと顔を出すことのできる「場所」は、いつまでもあつてほしいと思います。